

武谷水城について－太宰府市史落穂拾いの試み－

はじめに。

武谷水城は嘉永5（1852）年に福岡藩士尾石信一の息子尾石豊として生まれた。藩学修猷館および文武館に学び、明治5（1872）年に金沢医学校で基礎医学を学ぶ。明治7（1874）年に武谷祐之の養嗣子となる。明治9年に祐之の三女仲と結婚する。明治7年陸軍軍医学校に入学し、明治10（1877）年2月に卒業する。明治10年4月に尾石豊を改め武谷豊を名乗る。この間、陸軍軍医試補となり陸軍本病院第一課に属し、西南戦争に従軍する。明治23年ころ、武谷豊を改め武谷水城と名乗る。明治37（1904）年、日露戦争に際し第一師団軍医部長に任じられる。明治39（1906）年、陸軍軍医監となり、予備役編入となる。

退役後の明治42（1909）年、郷里福岡に戻り、福岡市本庄町（現在の福岡市中央区今泉1丁目・2丁目一帯）に居を構えた。大正2（1913）年、郷土史の研究団体である筑紫史談会を創立し、幹事長として会の運営を行った。大正3（1914）年、機関誌筑紫史談を発行し、昭和14（1939）年に武谷水城は亡くなるが、その間筑紫史談は74集発行され、彼の死後も昭和何年まで発行が続けられ、昭和20（1945）年の最終号は第90号を数えた。また、彼は在郷軍人会顧問、福岡県教育会会長、黒田家奨学会理事、私立の筑紫高等女学校の後援会長の職に就いている。

ここでは、おもに郷土史家としての武谷水城について考察を行うことにする。まず、最初に細かい、あるいは重箱の隅の議論かもしれないが、武谷水城の出生地、改名後の水城というの名前の由来について、確認することにする。この問題は武谷水城の研究姿勢の問題と大きく関わると考えるからである。

1. 【史料1】の写真について

①右下に「太宰府宮小路写真館」の刻印がある。

②何の写真か。

陸軍軍医少将武谷水城閣下水城防塁保存会臨席記念

③撮影場所

水城東堤の東端、旧国道3号線を前面にして。

④撮影の年月日 昭和7（1932）年4月～昭和12（1937）年3月→昭和7年の可能性が高い
尾石研介

修猷館中学、昭和12年卒、昭和7（1932）年4月～昭和12（1937）年3月在学。

長沼賢海

昭和6（1931）年に写真撮影場所で水城の大樋の発調査を行っている。

⑤写真の意義

- ・水城保存についての武谷水城の熱意
- ・水城跡保存についての地域住民の意識の高まりを窺うことができる。
- ・昭和初期の水城東堤東端の断面を窺うことができる。

2.武谷水城の出生地について

【1】大熊浅次郎(『筑紫史談』第75集「史学界先学武谷水城翁の遠逝を悼む(弔辞)」、昭和14年)、『日本史研究者事典』(吉川弘文館、平成11年)、『太宰府人物志』(太宰府市、平成25年)

嘉永五年十二月十六日を以て、筑前國御笠郡(今の筑紫郡)水城村に生まれ、

【2】武谷恵美子(筑紫女学園短期大学紀要第35号『森鷗外と武谷水城』、平成12年)

御笠郡国分村水城とする。

【3】武谷水城(筑紫史談第51集『水城史観 下の上』、昭和5年)

御笠郡上水城と紹介。

- ①著者が偶然にも此の一大古蹟の地に生を受け
- ②著者の実家にてこの仕組在住を願ひ、弘化より嘉永年間に亘り、御笠郡(今筑紫郡)上水城に在住せり。此の上水城は水城村に属せず、国分村の枝町
- ③生を此の地(東関門址より二家を隔つ)に受け

【出生地についての検討】

(1) 大熊浅次郎のいう武谷水城の出生地の説明は、正しくない、または適當ではない。

嘉永五年の時点では、上水城が属す国分村でなく、水城跡を堺に北隣する水城村を指すことになってしまい、正しい説明ではない。

明治22(1889)年の市制・町村制施行後の御笠郡水城村のことだとしても、上水城が大字国分に属し、大字水城に属さないことが不明瞭になり、適當ではない。筑紫郡水城村でも同様のことがいえる。

(2) 武谷恵美子のいう御笠郡国分村水城も正確でない。

武谷水城自身がいう出身地御笠郡上水城は国分村の枝町であり、上水城は水城村に属さない。国分村の枝町はあくまでも上水城であり、水城ではない。

(3) 武谷水城は昭和5(1930)年の時点で、出生地は御笠郡水城村や筑紫郡水城村といわずに、御笠郡上水城といい、特別史跡水城跡の関連で出生地を説明している。これは、御笠郡国分村の隣村の水城村が出生地と混同されたくないという武谷水城自身の強い意志の表れと考えることができる。

武谷水城出生地の表記の変遷

嘉永5(1852)年	筑前国御笠郡国分村の枝町上水城
明治4(1871)年	福岡県御笠郡国分村の枝町上水城
明治22(1889)年	市制・町村制施行 御笠郡坂本村・水城村・国分村・観世音寺村・通古賀村・片野村・大佐野村・向佐野村・吉松村の9ヶ村が合併して御笠郡水城村となる。
	御笠郡水城村大字国分字上水城
明治29(1896)年	御笠郡・那珂郡・席田郡の3郡が統合して筑紫郡となる。
	筑紫郡水城村大字国分字上水城
昭和30(1955)年	筑紫郡水城村と太宰府町が合併して太宰府町となる。
	筑紫郡太宰府町大字国分字上水城
昭和57(1982)年	太宰府市制施行。
	太宰府市大字国分字上水城

3. 武谷水城の生家跡について

【武谷水城の生家についての記述】(筑紫史談第51集『水城史観 下の上』、昭和5年)

- ③ 生を此の地(東関門址より二家を隔つ)に受け
- ④ 此の時上水城の民家西側に十一戸、東側に同じく十一戸ありて、其の内一戸は御茶屋と称して、旧藩重臣等檢地時の休憩所なり。(前集口画鬼瓦所蔵主松島氏は其の家なり) その一戸のみ大堤の北側(今の大堤碑の樹てる所)に在り
- ⑤ 他は西側の民家と共に、悉く大堤の南方にありて、共に大堤とは丁字形
- ⑥ 現存せる東関門の礎石は、其の南隣末永某
- ⑦ 著者の隣家たりし萩尾某

【生家跡】

太宰府市国分2丁目16番17号と推定する。

4. 豊を水城に改名について

2. で考察したように、武谷水城の出生地を水城村とするのは適当でない。武谷自身が考える出生地はあくまでも御笠郡(国分村の枝町)上水城である。よって、水城村にちなんで水城に改名したというのも適当でない。武谷水城が改名した水城という名は一大古蹟である水城跡からとったものである。

5.水城の実測者について

【史料3】水城大堤之碑

(正面)

水城大堤之碑

(正面向かって左側面)

陸軍軍医監従四位勲三等武谷水城撰書

(裏面)

天智天皇三年。於_二筑紫_一築_二大堤_一。貯_レ水。名曰_二水城_一。距_レ今一千二百五十二年。

稱徳天皇天平神護元年三月。太宰少貳従五位下采女朝臣浄庭。爲_二修理水城專官治_一。

距_レ今一千百五十一年。

今。東堤長百七十六間三尺。西堤長三百八十四間三尺。總長五百五十一間。最高所五間五尺。盤根廣所十九間一尺七寸。中央欽堤所九十六間。西堤近年中斷。爲_二二堤_一。此所即東方關門之址。存_二片礎_一。其西方關門。即吉松墜道之所。

(正面向かって右側面)

大正四年乙卯十一月爲_二大典記念_一建_レ之

福岡縣筑紫郡技手竹森善太郎實測

水城村水城青年會建_レ之

【水城の実測について】

武谷水城は、筑紫史談第51集『水城史観 下の上』において、水城村大字水城(元の水城村俚称下水城)の青年会が大典記念の事業として水城大堤碑の企画・建立の経緯を説明するなかで、次のように述べている。

⑨此の議決の結果、著者生誕の縁地なるを以て、当事者来りて其の理由を陳し、著者の命銘、及び撰文を乞ひたり。

⑩続風土記を初めとして、十数種の書、水城堤防の長・高・広・差のあること、前述の如く、従来学者の迷惑する処なり

⑪同村の出身にして、筑紫郡土木技手たる竹森善太郎、之れが実測の任に当り、十数日にして之れを完了せり。

⑫余は碑文に代るに此の実測の結果を以てせば、實際斯界を裨益すること、大なるものあるべきを思ひ、之れを当事者に協りしに、当事者亦た之れを容れ、普通の碑文を止めて、之れに代るに築造・修理の年代と、今回実測の結果とを刻する事と為りたり。

以上の⑨～⑫により、次のことが判明する。即ち、大字水城の青年会員は建碑にあたり、郷土出身の武谷水城のもとに、命銘、撰文を依頼をしに来た。その青年会員に対して、武谷水城はとりあえず水城の実測を提案したようである。そこで、水城村出身の筑紫郡土木技手竹森善太郎が実測を担当することになり、彼は十数日で実測を完了した。さらに、十数種の書で水城堤防の長・高・広について記述がまちまちで一定していないので、武谷水城は碑文に今回の竹森善太郎の実測で得られた実測値を刻すれば、史学会に大いに利益をもたらすと考えた。武谷水城は、普通の碑文を止めて、そのかわりに築造・修理の年代と、今回実測の結果とを刻することを青年会にはかった。青年会もこれに賛同し、築造・修理の年代と、今回実測の結果が刻されることになった。

ついでながら、筑紫史談第51集『水城史観 下の上』において、武谷水城はこのような記述もしている。

⑧著者帰郷後、去る大正四年春挙家水城に至り、上下両水城の老弱旧知を招して、土居山今昔の変遷など談せし事ありしが、昔年とは違ひ、地方人の郷土史想進捗せしを觀たり。

これは、青年会の建碑事業が円滑に進捗し、達成できるよう、武谷水城が地元の大字国分の字上水城と大字水城の字下水城の人びとに協力・負担を依頼したものと考えられる。武谷水城の建碑への熱意・意気込みを感じるとともに青年会への彼なりの配慮・協力が窺えられる。

水城大堤之碑では水城を実測したのは筑紫郡技手竹森善太郎であるが、実際には武谷水城が実測を提案し、さらに普通の碑文のかわりに水城の実測値を刻することをも提案したのであった。これは実質、水城の実測は武谷水城と竹森善太郎の共同作業といえるのではないだろうか。

6. 武谷水城・竹森善太郎の水城実測の位置づけ

【1】『靖方溯源』明治24（1891）年

実測値は記述されていない。

【2】黒板勝美「福岡県学術研究旅行報告書」（『史学雑誌』25-3）大正2（1913）年

・実測値は記述されていない。

【3】黒板勝美「福岡地方旅行談」（『考古学雑誌』4-6）大正3（1914）年

・鉄道院参事宇佐見法学士に水城開鑿について注意を与え、充分保存の道を講じるよう要望。
・水城西堤の切断面（現在のJR水城駅側）

目測で高さ30尺ばかり、幅50間ばかり。

実測で最高27尺、長さ144尺即ち24間ばかり。

【4】中山平次郎「水城の研究」（『筑前史談会講演集』第1集）大正3（1914）年

・「水城の各部の長短は、一通精密に測量して置いて戴き度思ふ。」

- ・水城西堤の切断面（現在のJR水城駅側）

水城の最高処 鉄道面より高き事4間余、田の面より測れば約5間許。盤根が35間余。以上は歩測による。

【5】武谷水城・竹森善太郎（「水城大堤之碑」）大正4（1915）年

- ・水城全体の実測を行い、実測値を水城大堤之碑に刻んでいる。

【6】島田寅次郎福岡県嘱託（「水城跡2」太宰府市教育委員会）平成15（2003）年

- ・昭和5（1930）年、県費で600分の1の水城堤防内外の実測図を作成している。
- ・この図は現在所在不明である。

【7】太宰府市教育委員会（「水城跡2」太宰府市教育委員会）平成15（2003）年

- ・水城跡の詳細実測図を作成する。

7. 【史料7】水城実測図（水城大堤実測圖）について

- ・【史料2】筑紫史談第五拾壹集表紙の本集目次

●巻頭寫眞 水城大堤最近の実測圖

大正四年八月實測

昭和五年十月追測

- ・【史料7】水城実測図（水城大堤實測圖）

大正四年八月實測、昭和五年十月追測

断面600分の1の縮尺、長さ1200分の1の縮尺

- ・【史料7】の水城実測図（水城大堤實測圖）は太宰府市教育委員会の報告書で所在不明ととされている島田寅次郎作成の水城堤防内外の実測図と考えられる。
- ・武谷水城・竹森善太郎が行った実測では実測値を得たが、実測図の作成までには至らなかった。武谷水城は実測図の必要性を考え、筑紫史談第五拾壹集に【史料7】の水城実測図（水城大堤實測圖）即ち島田寅次郎作成の水城堤防内外の実測図を付けたと考えられる。

8. まとめ